

2012 年度大学評価報告書の特徴

教育支援本部担当常務理事 浜村 彰

2012 年 1 月に大学基準協会に対し認証評価のための申請書として自己点検・評価報告が提出され、書面審査を経て本年秋には実地調査がなされる予定である。そうした事情もあって、4 年目となる今年度の自己点検評価活動については、評価項目を教育課程・教育内容、教育方法、教育成果、教員・教員組織、内部質保証の 5 つに絞り、①学部等における主体的な内部質保証活動の継続、②学生の能力育成の目標設定とその検証体制の整備、③法令の順守状況の確認の 3 つを自己点検の基本方針として、各運用単位で自己点検評価活動に取り組んでもらうこととした。

今年度の報告書の特徴としては、各運用単位の現状分析シートの冒頭に前年度の大学評価委員会の指摘事項に対する具体的な行動を記載させ、評価委員会によるチェック (Check) に対して各単位が行ったアクション (Action) を明確化することにより、PDCA サイクルのとくに C と A が実効的に回っている否かを確認しているところにある。この点に関する今年度の評価委員会による評価 (運用単位ごとの「自己評価結果および大学評価委員会の評価結果への対応に関する所見」欄参照) をみると、各運用単位がおおむね評価委員会の改善指摘等に適切に対応していることがうかがわれる。この点からすると、本学の自己点検・評価活動の当初の狙いは一応達成されているようである。とはいえ、なおも改善に取り組むべき指摘を受けている運用単位も散見されるから、各単位の改善アクションに向けた一層の取り組みが望まれるところである。

とくに最初に述べた 3 つの自己点検基本方針のうちの①学部等における主体的な内部質保証活動の継続については、昨年度から各学部には質保証委員会が設けられ、内部質保証の実質化に取り組んでもらっているところであるが、この委員会の役割や権限、責任体制に関して学部により濃淡が見られることは否定できず、今後はこの質保証委員会と学部執行部の役割分担を明確化するなど、その活動の一層の実質化を図ることが大きな課題となっている。とりわけ、自己点検・評価活動が各学部の執行部に任せきりになることなく、若手も含めた学部の構成員全員でそれぞれの学部の教育の現状と改善すべき問題点を共有化し、学部全体で教育の質保証に取り組む内部システムとして定着化することを願ってやまない。

毎年の学部等運用単位の労を惜しまない自己点検活動と評価委員の誠実な評価に対してあらためて敬意を表したい。昨年度も指摘したところだが、内部質保証の鍵を握るのは、点検・評価 (Check) した後に、目標の見直しや浮かび上がった問題点を解決するという取り組み (Action) の実効性である。手間がかかる作業であるが、それこそが、各学部等の運用単位の教学改革が着実に進む近道なのである。